

歴史と宗教の位置の転換

—— 地球の文明転換の時 ——

山波言太郎

初出「ボルテ・チノ日本の心」2号
『日本の言霊が、地球を救う』所収
2009年7月

目次

序

- 一、宮沢賢治のデクノボーについて
 - 二、事の始まり、ジンギス汗から現代世界は流れ出た
 - 三、現代世界の闇も光もジンギス汗から
 - 四、魔物か、奴隸か、行く末の人の運命
 - 五、国宝とは何か 人なり、道なり、空なり（空とは永遠のいのちなり）
 - 六、人は今、即身成仏の時に来ている
 - 七、衆心進化論のすすめ
- 結び もう一度、歴史と宗教の位置の転換

序

「歴史の転換」とは、人類史が戦争のある歴史から、戦争のない歴史へと、方向転換することです。「宗教の転換」とは、「外の神」から、「内なる神」への大転換です。即ち宗教の偶像崇拜の放棄、それだけでなく、外にあるお金や物を至上の神として生きる在来の人間の文明の方向転換です。そうして内在の神に目覚めた新たな人間の生き方の第一歩を踏み出すこと。こうすれば人類の恒久平和の歴史がそこから始まります。このような歴史と宗教のそれぞれの一八〇度方向転換のことを、「歴史と宗教の位置の転換」と、宮沢賢治は称していたと私は考えています。以下これについて私見をいろいろ書くことにします。

一、宮沢賢治のデクノボーについて

宮沢賢治の生涯は「みんなの本当の幸福を求めて」の旅でした。そのため〈心象スケッチ〉と自分で呼んで詩を書きつづけました。それはこの世と見えない世界をとりまぜたスケッチでした。そして必死で童話を書きつづけた三十八年の生涯でした。彼はなぜ「ほんとうの話」とか、「ほとけの心を書いた話」とか母にも伝えた童話を、必死で生涯書き続けたのでしょうか？……私の解釈では、みんなが（世界の人すべてが）本当の幸福になって貰いたかったからです。そのために本当の仏の心の童話を書きつづけたのです。では、彼にとり本当の幸福とは何だったのでしょうか？

彼は死ぬ少し前に、病床で「雨ニモマケズ」という詩をひそかに手帳に書きつけていました。世界の人が皆デクノボーになるのが彼の夢でした。そうすれば世界が本当の幸福な世界に変わるからです。そのためには言い出しつぺの彼が先ず最初にデクノボーにならねばなりません。こうして死の間際まで賢治はデクノボーになり切ろうと努力していました。

彼にとってデクノボーとはいったい何だったのでしょうか。それは法華経の「妙法蓮華経常不軽菩薩品第二十」に出てくる、常不軽菩薩のことです。この人は生涯みんなにバカにされながらも、人は皆仏であるとして礼拝して歩きました。常に人から軽んぜられる存在であつた彼が、生まれ変わたら釈迦になつたと言われます。皆さま、これが、常不軽菩薩の歩く姿が「本当の幸福」への道ではないでしょうか。「一切衆生悉有仏性」（涅槃経）、故に他者を仏として礼拝、それは即ち奉仕・献身に明け暮れる生涯。これが賢治のいうデクノボーです。世界のみんなが常不軽菩薩の道を歩いたら、皆がきつと未来は釈迦のようになれる。これが賢治にとり悲願としたデクノボーでした。そしてこれこそが宮沢賢治にとって、「世界が皆本当の幸福」になれるとっておきの道でした。

だから、処女詩集『春と修羅』が出た時、印刷屋が間違えて表紙に「詩集」と印刷しました。彼はあわてて、自分の手で一冊一冊ブロンズの粉で詩集という文字を消しました。なぜ、そんな事をしたのでしょう。その意味は……………森莊已池氏が岩手日報でこの詩集を高く評価した時、すぐに森氏に手紙を出しました。……………その手紙の中にこの意味がハッキリ記されていました。

「春と修羅」……………これらはみんな到底詩ではありません。……………或る心理学的な仕事の仕度に、正統な勉強の許されない間、境遇の許す限り、機会ある度毎に、いろいろな条件の下

で書き取って置く、ほんの粗硬な心象のスケッチでしかありません。私はあの無謀な「春と修羅」に於て、序文の考を主張し、歴史や宗教の位置を全く変換しようと企画し、……………」

賢治にとり、詩とは心象スケッチ、即ち文学作品「詩」として構成されたものではない。なぜ、そんなスケッチを記しておくのか。それは未来に〈或る心理学的な仕事〉をする準備なのです。その心理学的な仕事とは、〈今は正統な勉強の許されない〉ような種類のもの。いったいそれは何か？それは〈無謀な『春と修羅』の〈序文の考えを主張〉するようなもの。そうすることで〈歴史や宗教の位置を全く変換しよう〉と（賢治が）企画し〉ているもの。

いったいそれは何なのか？ その事は『春と修羅』の序文さえ見れば判ります。

序

わたくしといふ現象は

仮定された有機交流電燈の

ひとつの青い照明です

（あらゆる透明な幽霊の複合体）

風景やみんなといっしょに

せはしくせはしく明滅しながら

いかにもたしかにとりつづける

因果交流電燈の

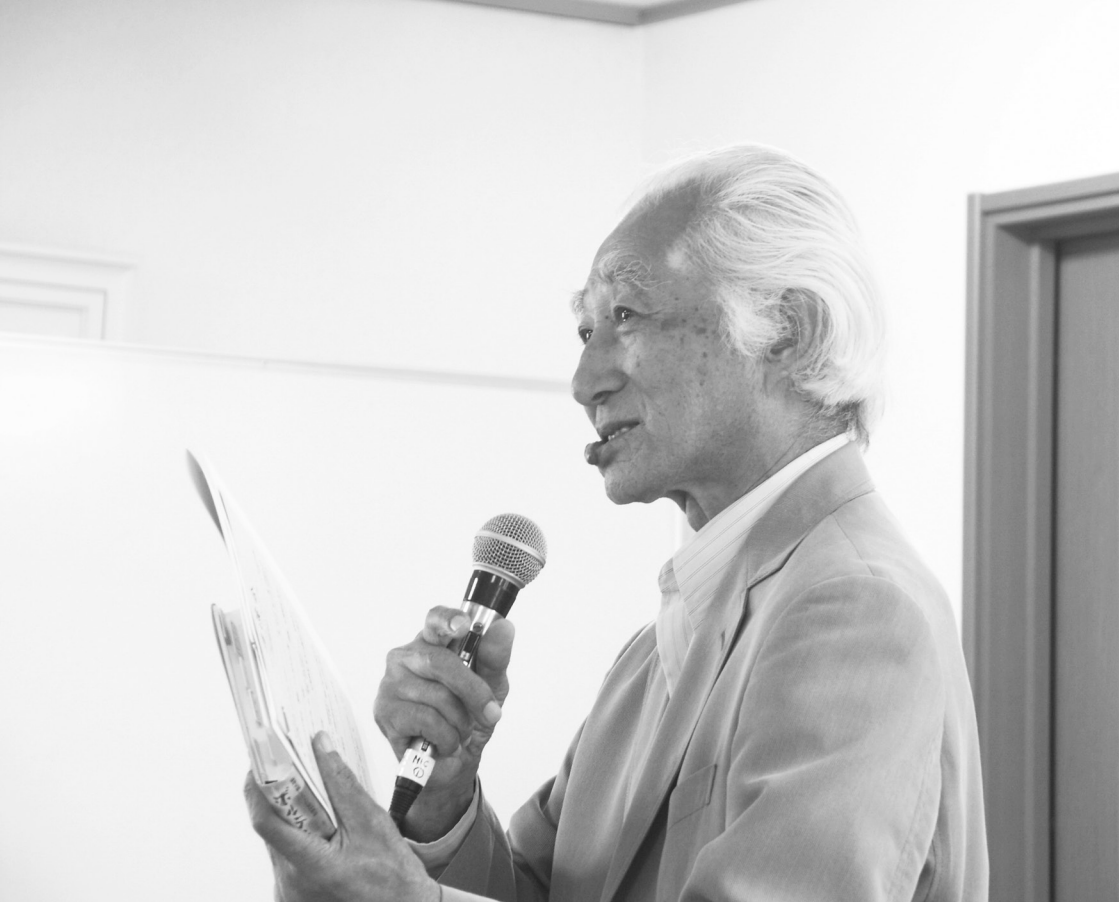
ひとつの青い照明です

(ひかりはたもち その電燈は失はれ)

(後略)

これは一言で言うと、一八四八年から欧米で始まった科学者らによる〈近代心霊研究〉の帰結である「スピリチュアリズム」を、学問体系として〈或る種の心理学〉として成立させたいという試みではないでしょうか。なぜなら、「序」の詩句はまさしく近代心霊研究の最終帰結である「ネオ・スピリチュアリズム」そのものです。

〈わたくしといふ現象〉即ち現実の人間は、(あらゆる透明な幽霊の複合体)。つまり周りに生命エネルギー体である霊(善霊・プラスエネルギー体とか、邪霊・マイナスエネルギー体とか)がウヨウヨいて、それらから影響を受けながら自我意識を作っている生きもの。でも、ムヤミにアトランダムに周りから影響を受けているのではなく、(いかにもたしかにとりつづける、因果交流電燈の、ひとつの青い照明です)。つまり、自己の明か暗かの意識に正確無比に因果交流しながら、それに相応する明か暗かの周りの生命体である霊からの意識影響を受けながらキャッチしている生きもの。それはまさしく確かな因果交流電燈のような、一つの生きた(青い)照明灯みたいなもの、それが私、人間です。ネオ・スピリチュアリズムでは、これを「波長の法則」(注、物理学的に言えば共鳴共振の法則)



山波言太郎 2008 年撮影

と呼んでいます。

こうして生涯を終えたら、（ひかりはたもち、その電燈は失はれ）です。つまり電燈である（肉体）は壊れ失われます。しかし光は保たれます。不滅の光である霊（生命原因）が保たれ、死はありません。

何と、近代心靈研究の帰結であるネオ・スピリチュアリズムを、宮沢賢治は詩で正確にとらえ描写していました。八十余年も前に。彼はこれを科学として位置づける研究を将来したかったのです。何のために？ それは彼の悲願である「皆の本当の幸福」な世界を未来に作るためにです。それには、どうしてもデクノボー（釈尊の前世の姿である、人々から馬鹿にさ

れた常不輕菩薩のような）生き方をしなければならなかった。なぜなら、靈魂を認めたり、ましてそれを学問体系にするなどということは、アカデミズムでは許されません。もしやっかとしてでもハジキ出されてしまいますから。

以上で、賢治の「世界がぜんたい幸福に」なれる方針が見えたでしょうか。永遠の生命、人と人は交流し合う兄弟同胞……それならば私達の運命は大きく一つのもの。どうしたらこの人類運命の共通の綱^{ツナ}を良い方向に向けることが出来るか。それは一人一人が常不輕菩薩のようなデクノボーになること。どうしたら人はデクノボーになれるのか。また一人のデクノボーから伝染して皆が本当にデクノボーになれるのか。皆がデクノボーになれば次生でこの地球はみんなが釈尊のような人ばかりが住むパラダイスになれるものを。

こんな夢のような話を、宮沢賢治はハッキリ意識していたから、覚悟を決めて詩（心象スケッチ）を書いたり、あの珠玉の童話作品を書きつづけていたのです。私達は、少なくとも私は賢治を支持します。そして賢治が意図したデクノボーとは、「日本の心」そのものであることを確信しています。これから、それを少しずつ解明していきたいと思います。